

江戸語の「～ばいい」

中野伸彦

“～ba ii” in Edo Japanese

Nobuhiko Nakano

(Received September 28, 2001)

一

君に記憶を取り戻させるためには、本当のことを教えてやればいと、分かっていた。(猿 430・18)^①

本当に申し訳ありません。クリーニングで落ちればいいんですが(掌 57・1)

のような、「～ばいい」^②は、江戸語でも使われているが、その使い方を見ると現代語とは異なるところがある。本稿では、現代語と比較しながら、江戸語の「～ばいい」について、主として、「～ばいい」が使われる形式に関わる問題を見ていきたい。

二

まず、現代語の「～ばいい」について見ておくことにする。現代語の「～ばいい」の表わす意味については、種々論じられているところであるが、国立国語研究所(一九六四)で述べられているような、「～ばそれですむ」という、消極的なニュアンスをとまなう」と、「話し手の希望をあらわす」ものとの二つに分けて考えるのがよいのではないかと思う^③。

「～ばそれですむ」の意味を表わすものは、大きく分ければ、三つに分けられる。

一つは、次のような「～ばいい」である。

排水溝が汚れば洗剤で洗えばいい。汚れが落ちねば本体を取り替

えてしまえる。だが、腸だとそうはいかない。(火天 10・16)

とにかく、今は不必要に気にしないこと。気にしだすと、どんどん細かいことが気になるばかりでできりが無いぞ。夜、うるさくて眠れないなら、朝寝坊すればいいだけのこと。(いちばん 63・3)

最後のハムレットとレイアーティーズとの剣の試合の後、城の広間は一瞬にして海にならねばならぬ。それには城自体を幕に描けば良いのだ。(ハムレット 96・5)

悪戦苦闘は続いていた。だから最初から扉を開けておけば良かったんだ、という木村の泣き言をときおり竹丸が皮肉な口調で遮るほかは、全員の息遣いと人間が扉を押しさしみだけが響いていた。(火天 428・12)

出世するにはどうすればいいか、知ってるか、(修羅 111・4)

高梨(一九九五a)・高梨(一九九五b)で、「特定のよい結果を得るための手立てとして、当該事態が必要十分であることを述べる」と言われているようなものである。ただし、若干の補足が必要である。

一つは、高梨(一九九五a)・高梨(一九九五b)では、「『ばい』」が「特定のよい結果を得るための手立てとして、当該事態が必要十分であることを述べる」のに用いられるのは、「『』」が(以下、「『ばい』」の「『』」の部分指して、単に「『』」と呼ぶ)「制御可能な事態として捉えられている場合」であるとされているが、次の例のような場合、「制御可能な事態として捉えられている」わけではないであろう。

「でも、警察に連絡取らないといけませんよね」

(略)

「そうだ、来る途中に別荘地があったでしょう、あそこならば町へ

降りるより手間はかかりません。あそこまで行って電話を借りればいいのです」

(略)

「いえ、残念ですが、今の季節は誰もいないと思います、あそこは避暑地ですから」

(略)

「いや、人がいなくても電話さえあればいいのです。戸締まりはしているでしょうけど、この際です、緊急避難の拡大解釈ということで、不法侵入は大目に見てもらいましょう」(星 200・12)

かたく握った雪の玉だったのかも知れないぜ、凶器は——笑うべからず。とつぴな想像だが、条件がふたつ揃やあいんだ。ひとつは被害者が、安定した標的であること。(略)もうひとつの条件は、犯人の自信だ。一発の雪玉を、的確に被害者の後頭部に命中させる自信。(最長 134・6)

「結局は振り出しですね、やっぱり俺の聞いた声が犯人だったんですよ」

「それが正解らしいね——しかし、かと云ってそれが誰か絞り込めるデータは何もない」

星園が云い、和夫も考え込んだ。

「そうですね、俺が思い出せばいいんですけど、全然ダメだし——。(略)」(星 284・11)

このような、「『』」が「制御不可能なもの」、従って、「手立て」とは言い難いものも含めて考える必要がある。

もう一点は、必ずしも「よい結果」には限らないのではないかという

ことである。「よい結果」と言えるものが多いのは確かだが、例えば、次の例の場合、「～」によって得られるのは、かえって「悪い結果」であろう（少なくとも、話し手と聞き手にとっては）。

「殺されるぞ。僕たちは殺されるんだ」

「彼女は動転してしまっただけだよ。殺せるはずないじゃないか。」

木田とかいう男や結城とかいう女が俺たちを見てるんだ」

「帰ったと言えはいい」（猿 552・5）

あるいは、次の例でも、「ドアに鍵がかか」ることは、現実起きているが、どうやってそうなったかが不思議なことというだけで、特に「よい結果」というわけではないだろう（犯人にとっては、「よい結果」かも知れないが）。

ドアに鍵がかかっていたことは問題ではありません。犯人は内側から鍵をかければよかったです。（名探偵 112・11）

どのようにしたらその結果が得られるのかということが問題にされるようなものであればよいのであって、特に、「よい結果」という限定を付ける必要はないのではないだろうか。結局、一点目と合わせて、「ある結果を得ることは、『～』という手立てによって、あるいは、『～』という事態が成立することによって、可能であるということ」を述べるものというように言えばよいかと思う。

二つ目に、次のような場合がある。

「なんでじゃないでしょう。わけもなしにひとのことを悪く言ったらあやまるべきよ」

聡は不快の色を目に強く浮き出させ、翔子をにらんだ。

「聞こえてないのなら、いいじゃないか」（火天 286・13）

「おい、暮林」鷲尾は反対意見を無視して、話しかけた。「お前、どこでそんな技術を覚えた」

だが暮林は、にやにや笑うばかりで鷲尾の質問に答えなかった。

（略）

「言いたくないのなら、いいさ。（略）」（修羅 661・6）

あるよくないこと・望ましくないことについて、「～」という条件の下では、許される・あきらめるといったことを述べるものである。右の例で言えば、「ひとのことを悪く言」うことはよくないことだが、「（相手に）聞こえてない」という条件の下では許される、あるいは、「どこでそんな技術を覚えた」かを言わないことは望ましいことではないが、「言いたくない」という条件の下ではあきらめるといふことを述べているわけである。

「実は僕、貝類が苦手なんです。普段はあわびとか、ほとんど食べないんです」

途端に勢いづくニコライ江木氏。「あ、そう。そんならいいいいよ、俺たちが食うから、全然気にしないでいいよ」（平成 228・5）

女はみんな4の不可に●なんだな。やなわけ？ いいじゃん、年齢が

違えば。（この部屋 39・14）

「りきしさべつ？」

（略）

「そういう意識はないと思いますが」

「意識していなければいいというもんじゃない。無意識でも笑いをとっている。力士は雄々しい人であり、滑稽な人じゃない」（どす

こい 66・11)

「折角、会ったんだから、少し話をしたいな」

と、田崎は自分でも呆れるほど甘えた声を出した。

江都子は手首を目に近付けた。小さな時計が銀色に光っている。

「忙しけりゃいいんだよ。用事があるわけじゃないんだから」

(ゆき 215・2)

三つ目に、次のような場合がある。尾方(一九九八a)の言う、「『いい』を満たす最低のラインは越えていると述べる、『有効条件』とでもいう用法」である。「〜」が問題がない・不足がないものであることを述べるものである。

まして義兄さんは今、長田屋一門を率いてこの稽古に参加し、ただですら気を遣うことばかりなのよ。あなたみたいにハムレットのこだけ考えてればいいって立場じゃないの。(ハムレット 260・7)

「宮田くん、宍戸がいる病院を知っている？」

奪われたものを取り戻し凱旋の車中でハンドルを握る御手洗が言った。

「ええ、一応聞いていますが」

「そんな奴のところへ行くというのか？ もう放っておけばいいじゃないか」(御手洗 下 170上14)

そのフィルムはお前に渡す。お前が好きなように使えばいい(修羅 679・3)

肉屋は肉を、商品として売ればよい。客観的な売買関係に、大袈裟な愛想笑いは必要がない。客と店員。そうした役割が、たがいに自明であるような場合には、アメリカ人は気楽に無愛想になれる。

(道 233・3)

ほくと奈津子が友情を感じあってしまったのは事実なのだ。友だち感情を抱きあってしまったのは、「ただの恋人でいましょうね」なんてセリフは通用しない。わざわざ仲介を頼むまでもないな。このまま友情関係に入ればいい。(この部屋 151・11)

「犯人が久里浜くんだなんて、わたし言っていないわよ」

「じゃあ誰だと言うんです」

「それは今は言えない。深雪さんと約束したから」

「久里浜だ。それ以外あり得ない」

「なら、そう思っただけいいわ」(猿 420・6)

せいぜい笑うがいい、そうやって中二の娘に騙されつづけ、ささやかな幸福の一時を味わっていいればいい、(インデイヴィジュアル 132・15)

のように、「〜」という振る舞い方で問題・不足がないと述べたり、

おそらくスズキタカノリにとって、ホームラン狙いを一切諦めるなら、首位打者を取り続けることはイチロー同様それほどむずかしいことじゃない。でもね、内野の頭を越えればよしというバッティングは彼にはできないんです。(御手洗 下 205上3)

酔えればいいというだけの安酒一合が八文から十二文、上出来の銘酒はみな二十文を越え、いわゆるプレミアム銘柄になると三十文以上のももあつた。(見世物 34・5)

あのエゴイスト。でかおつの最低野郎。自分だけ助かりゃいいと思いやがって、うっ(火天 431・4)

「あんたも夜遊びをたいがいにしなないと、後でつけがどんとくるよ」

「今が楽しきやいいのさ」(ねむり 165・17)

「待ってください」白木は慌てた様子もなかった。「要は鷺尾さんの腹立ちを、なんとか晴らす方法があればいいわけでしょう」(修羅 564・1)

「……もし」

「もし？」

「パスポートを奪還したのなら君と行き違いでアメリカに向かったとか……」

「それならばいいのですが」(御手洗 下 155上3)

享保十七年(一七三二)の夏、南町奉行所の同心岡田弥五郎という者が、伝馬町の名主新右衛門の家を訪れ、しばらく休んでいた。

これは、おそらくふだんよくやる巡回で、町奉行所の同心のうち定廻と呼ばれる者は、定期的に町方を歩き、治安の維持に努めていた。

しかし、訪れられた名主の方では、すぐ席を立てくれればよいが、居座られると酒などを出さないわけにはいかない。(お白州 142・10)

「でも、口で否定してるだけってこともあるでしょ。星園くんが今みたいなことを考えるのを予測して、一応否定のふりをしてても、本当は心の底では、UFO信者の気持ちを理解できてる人もいるかもしれない」

あかねが云い、星園はうなずいた。

「ええ、ですからもちろん、前々からずっと、という補足が必要ですね。前々からずっとUFO否定の立場を取り続けてきた人は犯人ではあり得ない、ということですよ」

「オーケー、判った、それならいい」(星 414・12)

半年後には烏有も一児の父親になる。(略)俺はこの子さえいれればいいんだ、ときゅつと抱きしめバカ親ぶりを発揮しているのだから。(木製 137下8～9)

生きていればいい……その言葉に藤岡やうるめさんの顔を思い出さざるを得ない。彼らの生前の表情を。そして残された百合子の嘆く姿を。(木製 33上18)

のように、「～」という事態が得られる(得られている)ということの問題・不足がないと述べたりするものである。

以上、「～」によってある結果を得られるという意味で「すむ」もの、「～」という条件の下では、許される・あきらめるという意味で「すむ」もの、「～」で問題・不足がないという意味で「すむ」もの、広い意味で、「～ばそれですむ」とまとめられるような「～ばいい」がある。

「～ばいい」には、もう一つ、「話し手の希望をあらわす」ものがある。話し手にとって「～」という事態が成立することが望ましいということを述べるものである。

ゲルトルートとはもう何年も前に別れたよ。ぼくたちの娘は寄宿舎に入っている。最終学年になったら、寄宿舎にいないで、ぼくのところ引越して来てくれればいいなと思ってるんだよ(朗読 187・10～11)

ファンタジーだよ。こういうの、あればいいな～って感じでさ(御手洗 上 304上4)

高橋会長が盛んに『事件が森永に飛び火しなければいいが……』と心配していたのを覚えています。(闇 187・17～188・1)

なお、国立国語研究所（一九六四）で、「話し手の希望をあらわすばあいには、『うば』でも『うと』でもちがいは見られない」と述べられ、高梨（一九九五a）・高梨（一九九五b）も、それに基本的に同意を示している⁵⁾。しかし、例えば、次のような「うといい」は「うばいい」には言いかえにくいのではないだろうか。

「実は今、自分の部屋のそばから電話してるんだ。偶然なんだけど、どこに住んでいたかわかったんだよ」

「えっ。じゃあ記憶が戻ったの？」

「そうじゃないけど、僕のことを知っている人と出会えたんだ」

（略）

「よかったね。すごくよかった」

「そうなんだよ。これで少なくとも、住む家だけはできたわけだし、後は少しずつでも記憶を取り戻せればいいんだけど」

「そうね。早く記憶が戻るといいわね」（修羅 481・13）

記憶を失った聞き手が、自分の過去に関する事実を次第につかんできている状況での発言である。ここで「うばいい」が使いにくいのは、「うばいい」が、「う」が実現しない可能性が低くないと見ている場合にかええないためではないだろうか。聞き手は自分のことであるから、不安に思つて、「記憶を取り戻せればいいんだけど」と言つてもよいが、聞き手を励ますような立場にある話し手としては、「記憶が戻るといいわね」と「うといい」を使うほうがふさわしいのだと考えられる。

二人はセロリを囁りながら、しばらく無言で海を眺めていた。

「——今年の夏は楽しかったなあ」

沙世子が、海に顔を向けたままポツンと呟いた。

「このまま無事に終わるといいわね」

「え？」（六番目 111・4）

（略）ただ世の中には突発事故というものがあるんだ。予想もしていないことが急に起こったりする。（略）そういう時に君に連絡が取れないと、とても困る。僕の言ってることはわかるだろうか？」

「突発事故」と彼女は言った。

「青天の霹靂」と僕は言った。

「起こらないといいわね」とユキは言った。（ダンス 上 297・17）

事件が起こりそうな気配もない状況での「無事に終わる」こと、「青天の霹靂」が「起こらない」こと、いずれも、実現しない可能性は低いと見られるものであり、やはり、「うといい」を「うばいい」には変えにくいと思われる。

三

江戸語の「うばいい」も、「うばそれですむ」の意味を表わすものと、話し手の希望を表わすものに分けられること、基本的に現代語と同様である⁶⁾。

・「うばそれですむ」

aある結果を得ることは、「う」という手立てによって、あるいは、「う」という事態が成立することによって、可能である

お前の。顔にやア。何かきつく出来。やしたねエ。是にやア。和国

橋の。実路孝を。付なさりやアい、（辰巳之園 377下4）

そんなに否がるくらゐなら下家で一人でお遊びなら能のに（春告鳥
五編卷之十五 597・12）

とはいつたが、あすこで食てくりやアよかつた。チトはらがきた山
しぐれだ。（人間万事虚誕計 初編 360・718）

b よくないこと・望ましくないことについて、「～」という条件の下で
は、許される・あきらめる

辰 「（略）おのしはお手習に行たじやアねへか。何でお帰りだ馬
「けふはね。あのウ。お清書だから。清書双紙を取りに辰 「そんな
らよし。早く行てお習ひ（浮世風呂 二編卷之上 13オ5）

かみ 「せへろくとはなんのこつちやエ山 「さいろくとかみ 「さいろ
くとはなんのこつちやエ山 「しれずはい、わな（浮世風呂 二編卷
之上 33ウ3ア）

サア出せ金ハねへのか なかアいひハ（恐可志 後編下巻 173・
12）

c 「～」が問題がない・不足がないものである

兼はる 「大きに寐わすれましてまことにモウ」茂 「ナンノかまふこと
があるものか おもいれ寐ればい、（略）」（春雨日記 二編卷の四
159・6）

おめへそんなに一時に買はずと翌も買ひなさればいいに（四十八癖

二編 266・1314）

酒の匂ひせへすりや能。（七癖上戸 卷之下 150・10）

か、（略）どうだ此ごろは。いそがしいかの女 アイ今朝も朝直し
が二ツ。けふも暮までに。十八九あつたか、其くらゐありやアい、

（寸南破良意 332上10）

・話し手の希望

この寒いに出てゆきをつたが。風でもひきそへねばよいが。（仮名
文章娘節用 後編上之巻 7オ1）

ふたりじやアさみしいね。だれぞくれればようざんすね。（廓大帳

119下13）

常住は日和がい、が、今日は雪でも降ればいいとおもつてゐる（春

告鳥 初編卷之三 422・718）

ただし、一例ではあるが、現代語にはない、次のような用法の例が見
られた。

条 「（略）老人といふ者は、自分が以前困たことがあるから、情人

をして世間をわるくしたり、主親の前を仕損て、一生まごくして

仕廻のを見かねて、異見も小ごともいつてくれるのだア。必ずく

悪く思ハねへがい。梅 「ヲヤ、それでも其人が困しても、今歳

をとつて若者に小言をいつて居られ、ば、若い時情人をしたが徳だ

ねへ。こりねへければい、かはりには、かはいがられもかはいがり

も仕ないで老父老女になつて、親鷲講や日蓮講にばかり勇壯である

のかへ。（春色袖の梅 初編下之巻 70・5）

意味としては、「こりなくてもいい」・「こりずに済む」という意味
であろう。

このように、「～ばいい」が担う意味の面でも、現代語と江戸語で若
干の違いが見られるのであるが、同じ意味を担っている場合でも、「～
ばいい」が使われる時の形に関して、現代語と江戸語では異なる点が見
られる。

例えば、話し手の希望を表わす「～ばいい」を使う場合、現代語では、

「うばいい」で言い切る形を使うことは、まれである。多くの場合、「うばいい」の後に、「が」・「けれど」といった逆接の接続助詞を付けて、言ってみれば、「う」が成立しないことに思いをいたす形をとる。

ああ。それまでに手遅れになってなければいいが（木製 281下7）
兄がみなさんにご迷惑かけてなければいいんですが（猿 135・6）
あの子はいい役者になりますよ。あのがむしやらなところが、いい方に出ればいいんですけれどね（ねむり 153・15）

逆接の接続助詞を下接させず、「うばいい」と言い切る形を使えるのは、次の二つの場合である。

ほくにもともだちができるのだろうか。ともだちができればいいなあ。（この部屋 173・7）

のように、他者へ向けて言うのではなく、話し手の内で語る「独り言」として、かつ、終助詞「な」を下接させて言う場合（「独り言」でも、「な」なしに「ともだちができればいい」などとは言えない）と、

「ほんと、五月ちゃんどうしちやっただら。無事だといいいんだけどな」（略）

「本当だね、誘拐犯人に殺されてなきやいいね」（夏 76・13）

「ふうん。浅田貴子さんは、これからどうなるんだらう？」

「奈良か、信州のサナトリウムに入ることになるみたいですね、たぶん奈良。大阪から近いから。ヴォランティアの人たちによる完全看護の病院なんですって」

「へえ、そんなとこ、あるんだー」

「はい、でもやっぱお金かかるみたい」

「ああ、それはそうだろうね」

「でも六千万円入れれば、一生なんとかやって行けるだろうからって」
「そうだね。うまく入れればいいよねー。そのお金、あちこちに取りなればいいけどな」（御手洗 下 322上4）

のように、同じ希望を共有する聞き手に、終助詞「ね」・「よね」等（「な」や「よな」でもよいかと思う）を下接させた形で述べる場合である。このうち、前者の場合については、やはり、「う」が成立しないことに思いをいたす形というのが当てはまるのではないかと思われる。

「な」を下接させた「独り言」には、単にそう言っただけというのではなく、その文で述べられている内容を巡って、思いを巡らしつつ言うという性格がある。

電話は……、一応、社外のものがないな。席を外してるのが、ちょっと長くなるが、そんなことは言ってもらえない（開け 40・4）

みかん、あつたな、みかん（キョロキョロする）（冬 114・5）

右の例で言えば、「電話は」社外のものがない・「（みかんが）あつた」と言っただけだが、そう確信しきれているわけではなく、本当に「社外のものがない」のか・「あつた」のか、確かめようとしながら語っているわけである。

香世子はすぐに戸を閉めたが、洋治の位置から、洋服ダンスの中が見えた。

—— ずいぶんいい洋服があつたな。でも、大学生の身分じゃクレイジューのジャケットなんかかんたんに買えねえんじゃないか？ いや、着道楽で洋服に集中して金かける人もいるからな。（クラス 135・

3）

「計算をする犬」だって、なにか種があるにちがいない。おそらく飼い主の表情、語気、動作などにより犬は「3」を持って来るか「5」を持って来るか、判断するのだろう。

バロンは、なにをキイにして飼い主の意図を察するのか。

——息子さんでもできると言っていたな——（不安 209・9）

また、右の例では、「ずいぶんいい洋服があった」・「息子さんでもできると言っていた」こと自体は、確信されていないわけではないが、なぜ「ずいぶんいい洋服があった」のだろう、あるいは、「息子さんでもできると言っていた」ことを考慮すると、「計算をする犬」はどのようにして、答えを出していると考えられるのだろうかなどと、「ずいぶんいい洋服があった」・「息子さんでもできると言っていた」ことを巡って、やはり、思いが巡らされているわけである。話し手の希望をあらわす「～ばいい」が、「な」を下接させた「独り言」として言われる場合には、「ともだちができればいいなあ。でも、本当にできるかなあ」などと、「～」が成立しないことに思いが巡らされる表現になるのではないかと考えられる。後者の場合については、「～」が成立しないことへの顧慮がある表現とは言えないであろうから、同じ希望を共有する聞き手に語る場合を除いてということになるが、話し手（だけ）の希望を「～ばいい」で語る場合、「～」が成立しないことに思いをいたす表現の形をとらなければならないという制約が、現代語にはあるということになる。（ある種の「臆病さ」のようなものが必要とされているということであるか。）

これに対して、江戸語の「～ばいい」には、右のような制約は見られない。次のような例を見ることができる。

・希望を共有しない聞き手に自分の希望を述べるもの^①

アノネ今夜三五兵衛様が来さつしやるはづだつき。夫レでどうぞ出てくんなさるめエか。よくいつて見てくれると今千さんにあつたら
 そういふからね。それでめエりましたのさ。どうぞ出て遣つておく
 んなさればい、ねエ（五大力 176下15）

はる 今しま屋のおかさんが来なんして八右エ門さんがお出なんしたトサおゐらんにごちらへ来るやうにとおつせへすゆへおむかいに
 めへりいしたトい、なんすからあとからと申てつかはしいしたどふ
 なんすへ梅 めへりいすめへからい、やうにいつておくんなんし

はる けふはちよつとでもお出なんせばい、ねへ（青楼籬の花 340
 下17）

小三「わたくしはモウあんまり嬉しくつて夢ぢやアないかと思ひますヨ 金「へん夢なら大かた。はやくさめればい、とおもふだらう
 小三「又そんなにくいことを夢ならどふぞ。いつまでもさめずにおれば。よふござります（仮名文章娘節用 前編下巻 16オ7）

どふぞ一年に一度でも、相かはらずぬしに逢たいとばツかり心の願ひ
 ひざますから、どふぞ願ひの叶ふやうにしてくれさつしやればい、。
 （春告鳥 一編卷之四 441・6）

「な」を下接させない「独り言」^②

ほんに／＼役者といふものは、どふしてあのやうにきれいなものだらう、今のやうにいつたのが、ばちでもあたらねへければい、。

（人間万事虚誕計 後編 405・12）

此間は天じんをかいて、猫ばゞ。撥皮はばん事、ひツペがす。ほんにどんなひきぎまだらう。いつその事張かへまへだ。皮でも破れば

い、よもや張かへぐらいはわかるだらう。(人間万事虚誕計 後編 409・6)

そりやアい、が、ひもじくなつてきた。はやくなんでも喰してくれりやアい、(春色辰巳園 後編卷の六 334・10)

じれつてへうなぎだのふ はやく来れバイ、(花名所懐中曆 二編下の卷 189・11)

梅「(略)それだから、何所のか人がお前様に恍惚なりきつてお在だヨ。しかし此節は塩梅が悪ツてお在だから、行なひねへ。作「ナニ、今寄て視たが、最早快なつたから。頓而お前の店に遊びに行と言たアネ。梅「ヲヤ、左様かへ、それぢやア能ねへ。早くお出なら宜。(春色恋白波 初編卷之一 21・3)

早く次助どんが帰つて来て呉れ、ば宜。左様すると何時私が帰つたか知れずに仕舞からい、がネへ。(春色恋白波 初編卷之二 40・4)

江戸語では、現代語にあるような制約なしに、「〜ばいい」を使って、自分の希望を述べることができたわけである。

なお、同様なことは、類似の他の表現についても、見ることができ。例えば、「〜といい」が話し手の希望を表わす場合、現代語では、「〜ばいい」と同様な制約がある。

コーヒーがお好みでないといひのですが。わたしは紅茶党なのでコーヒーは置いていないのです(多重 48・4)

「大丈夫ですか、勝手に開けちゃって」

「警察にお叱りを受けるくらい覚悟の上ですよ」

星園は、さつさとバッグの口を開く。

「お叱りで済むといひんですけどねえ」(星 212・8)

のように、逆接の接続助詞を下接させて言うことが多く、「〜といい」と言い切る形で使えるのは、

香世ちゃんもいるといいなあ(クラス 100・14)

のように、終助詞「な」を下接させた「独り言」として言う場合か、

倉田さん早く良くなるといいですね(木製 105上13)

のように、同じ希望を共有する聞き手に終助詞「ね」等を下接させて述べる場合かである。

しかし、これも、江戸語においては、それに限らず、次のような例が見える。

米八「今日はマアこ、までにして置ませう。あした又逢橋の毘沙門

さまへ参るから、丁度今時分来ますヨ。どうぞその時分お宅だとい、

ねへ 喜代八 「ほんに明日は寅の日だの。浅草へ行やくそくが

有けれど、おめへの来るまでまどふヨ(春色辰巳園 初編卷之二

272・5)

新「そんならの、今のはなしにするから、もしもおれが田舎へ往て金を取て帰らねへうち何処へか遣るといふわけになつたら、どう

ぞして越ヶ谷の塩屋といふ家まで逃て往て隠れておてくんね おれが往帰りとも其所へ寄るから、どうで当地にかくれちやアぬられね

へ是非そうしてくんなヨ」 是「どうかそうならぬうちにお帰

りだといひネ そしてその越ヶ谷とやらは何程の路だねへ 観音さ

まへ行程かへ」(春雨日記 二編卷の四 132・7)

現代語であれば、「お宅だといひんですけど」などとなるところである。

また、事情は若干異なるが、「〜てもらいたい」についても似たよう

なことが指摘できる。「～てもらいたい」を使って聞き手に要求をする時、現代語では、

講師は集まった刑事たちを軽く見渡してから、声を発した。

「日頃の激務の中、長い時間を講習にとられてしまうことに不満を覚えている者もいるかもしれない。そういう人物には、まずこのスライドを見てもらいたい」

講師は前置きもなく言うと、手を挙げて暗幕を閉じるよう、窓際の男たちに命じた。(修羅 24・11)

「依頼？」

「そうだ」フクスケは澄まし顔で言った。「この大きな死体を扱うのは、さつきも言ったとおり、ボクの手には余る。そこで、キミに手を貸してもらいたい」(續 140・4)

のように、「～てもらおう」ことを当然の権利であるものとして言うような場合には、「～てもらいたい」で言い切ることができるが、そうでなければ、

やがて健くんは、お宮の隅のほうでたむろしていたお年寄りの集団に近寄った。ゲートボールクラブの人たちだ。

「すいません、倉庫の鍵を貸してもらいたいですけど」(夏 94・12)

「申し訳ないが、相模原まで来られないだろうか」

「むろん、通夜には出ます。明日の夜ですね」

「いや。できれば今日中に、なんとか来て貰いたいのだが」(道

229・4)

のように、「～てもらいたい」で言い切らず、「が」・「けれど」といっ

た逆接の接続助詞を付ける必要がある。

これも、江戸語には次のような例がある。

あのおまへのとこへ八百蔵がまいりやすかへわつちやどうぞ扇子へ歌をかけたももらいたふござりやすよ(婦美車紫野 155上1)

茶屋の女房がお客に言うことばであるが、現代語であれば、「扇子へ歌を書いてもらいたいですか」などと言うところであろう(直接の行為者は聞き手ではないが、聞き手経由で「(八百蔵が)扇子へ歌をか」くことが実現するわけで、これも聞き手に対する要求と考えることができよう)。現代語に見られる、話し手の希望を表わす表現を言い切る形で使うことに対する制約が、江戸語では見られないという現象をここでも見ることができるのである。

今、現代語の、話し手の希望を表わす「～ばいい」に見られる形式上の制約が、江戸語においては見られないということ述べたが、同様なことは、「～ばそれですむ」の意味の「～ばいい」にも見られる。

高梨(一九九五a)で、「特定のよい結果を得るための手立てとして、当該事態が必要十分であることを述べる」「スレバイイ」について、「当該事態Pの行為者が聞き手、または第三者であり、Pが現実には行われていない、あるいは、それとは反対の～Pが行われているという文脈で用いられると、行為者に対する〈不満〉を表明する文になる。」とした上で、「この用法では、ジャンイカやダロウを伴っていわゆる確認要求の形を取るか、逆接のノニが後接する場合がほとんどである。」と述べられている。

「～ばそれですむ」の意味の「～ばいい」が、「行為者に対する〈不満〉を表明する文になる」時(「～」という振る舞い方で問題・不足が

ないということ述べる「うばいい」が、「う」が行われず、それ以上の余計な振る舞い方がされている文脈で使われた場合も、同じく、「行為者に対する〈不満〉を表明する文になる」と考えられる¹³。このようなものも含めて、現代語においては、「うばいい」の形式に制約がある。この「行為者に対する〈不満〉を表明する文になる」場合には、

彼はうばぬれだった。(略)

「いったいどうしたの。こんなに雨が降ってるのに、傘ささなかったの。車でもつかまえば良かったのに」(ねむり 12・17・13・1)

のような、反事実的なもの、すなわち、聞き手、または、第三者の行為である「う」が実際には行なわれなかった状況をうけて、「う」をすべきであったと述べるもの¹⁴、

朝の九時頃、チャイムが鳴った。

少し前に起きたばかりなので、食事もまだだし、化粧もしていなかった。誰だろうと思つて、ドアのぞき窓から外を見てみた。

郵便配達人だった。そのまま入れてくれればいいのにと思つていると、中年の男は「清水さん、速達です」と言つて、新聞受けに差しこんで帰つていった。(倒錯 監禁者 131・11)

「これはひどい、火膨れになってますね、すぐに冷やした方がいいですよ」

財野は、ほとんど同情のこもらない調子で云つた。

「何やつてるの」

戸口に立つたあかねが怒鳴つた。

「冷やすんなら外に出ればいいじゃない、雪の中にも突つ込めば」

云われて嗟峨島が飛び出して行く。(星 186・5)

のような、聞き手、または、第三者の行為「う」に関して、「う」に代わる別な行為がなされている状況、あるいは、別な行為がなされているわけではないが、なされていいはず¹⁵の「う」がなされていない状況で、「う」をすべきであると述べるものがあるが、いずれの場合でも、高梨(一九九五a)で述べられている通り、

あんな雑誌を見て見物しに来たんだろう。俺たちも同じだよ。でも中を覗こうとしたらこの家の奴に怒鳴られてさ。見られるのが嫌なら載せなきゃいいのに(木製 47下3)

寺坂は腹が減つて仕様がなくなつたらしく、漸く本気で脱出する気になつたのである。寺坂は顔に似合わずコンピュータに豪く詳しいのだ。早く言えばいいものを。(どすこい 186・5)

それにしても、もの好きだねえ。わたしなんか、いつも背景みたいな役しかしてないじゃないか。もつと、応援しがいのある役者のひいきになればいいのに(ねむり 111・8)

「あいつら、どっちもプライドが高くて言い出せないってことなんじゃないのか?」

「そうお? どうして沙世子ってああいうむつかしいこと言うのかしら。素直に好きって言えればいいのに」(六番目 208・1)

のように、「のに」・「ものを」といった逆接の接続助詞を下接させる場合、

それに、さつき話に出た田川とかいう連絡役の青年がいたなら、どうしてあのときだけ、貴之を遣いに立てて手紙を持って行かせたりしたんだろうな? 田川に行かせりゃよかったじゃないか。(蒲生

368・718)

「先月書いたあの小説には——実はネタがあるんだよ弓塚君」

「そんなことはサッコフアリンクスだって気がつきませよ。題名なんかそのまんまバクリじゃないですか。スー先生怒っちゃって大変でしたよ」

(略)

嫌だなあ怖いなあパーティとかで会いたくないよなあ——京塚は終に股に頭をつけた。

「なら書かなきゃいいでしょうに」(どすこい 332・8)

「——だから、それはさっきの刑事さんに説明したじゃないですか」(略)

「おれは聞いてないよ。だから説明してくれて言ってるんだ。」

「どうして同じことを何度も説明させるんですか。さっきの刑事さんから聞いてくれればいいじゃないですか」(修羅 27・819)

「まさか、あの事件を考えてるんじゃない。まだ犯人捕まってるじゃないみただから自分で解決しようとか」

「どうして判ったんだ」

(略)

「そりゃあ烏有さんの目の前で起こったことだろうけど、だからって烏有さんが考えなきゃっていう決まりはないし、まして私と会う時間を削ってまでする事じゃないと思うな」

批判的にねちねちと絡んでくる。鬱陶しいと思いつつも、確かに桐璃の云い分も一理ある。

「知り合いに木更津とかいう有名な探偵さんがいるんですよ。その

人に任せておけばいいじゃない」(木製 192下4)

とうとう地面を手で払い始めた隊員の後ろで、相棒はやれやれと首を振る。

「なあ、今日の搜索は打ち切られたの。どうせまた明日もう一回やるんだから、その時に穴掘ればいいだろ。みんなもう待ってんだぞー」

(夏 43・6)

のように、「じゃないか」・「だろう」を付けた確認要求の形にする場合が多い。逆接の接続助詞を下接させたり、確認要求の形にしたりせず、「～ばいい」(「～ばよかった」)と言いつ切る形で使うことは、現代語ではしにくいようである。言い切る形で使えるのは、「～ばいいのだ」(「～ばよかったのだ」と、「のだ」を伴う場合に限られる。

マネージャーだって、あの時笑いとばしてくればよかったのよ。それとも怒鳴りつけるとかね。そうすれば私だってひよつとしたら何かの間違いだったんじゃないかとも思えたかもしれないのに(ダンス 上96・12113)

「きみたち、布施さんにかかわれたんだよ。ゲレンデなら、まだ滑れる。豪快にすべるのが、腹ごなしにはいちばんだなんていわれたって、きみたちの腕前じゃね。無理なくらい、わかりそうなもんじゃないか」

と、岩下が笑った。めぐみは口をとがらして、

「だったら、とめてくれればいいんだわ」(最長 61・9)

でも、なんとか手を伸ばせば取れそう。私は体をせり出してカパーを取ろうとした。

「先生、危ないですよー」

「だってこれ、まだミス研のみんなにも見せてないんだろう。このままにして無くしたら怒られちゃうよ」

「だからって、棒か何かで叩き落とせばいいんですよ」（御手洗 上 90上16）

「さあ、石岡君、この門を乗り越えるんだ」

そう言つて、相変わらず一人元氣な御手洗が、錠のしつかりと掛けられた鉄の門の上に飛び乗った。

（略）

「おい、御手洗、見つかるはずだよ」

私は大慌てで、御手洗のシャツの裾を引っ張る。しかし、うろたえる私を振り返つた御手洗は、「だから見つからないうちに、石岡君もさつさと上がってくればいいんだよ」そう言つて、悠々とした動作で校庭の方へと飛び降りるのだった。（御手洗 上 242下6）

優子が動かなすぎるんだ。とりあえずやってみればいいのよ。埜邑くんとだつてまずつきあつてみればいいじゃない。けっこう非凡な男よ、彼つて（火天 90・5）

ただし、

「（略）こちらは依頼人だ。わかるだろうね。わしのところへ来てくださったお客さまだ。事件を扱つたのはきみでも、その行為は全部わしの身にふりかかつてくる。ここを経営しているわしのやり方にもだ。ミスター・ライデルは公正なる裁判で……」

「公正どころか、それ以上でしたよ」わたしは言った。

「そうだ。そして、陪審員も無罪と判断した。そのことだけをわきまえておけばいい。中身はなんであれ、依頼人がきみに託している

信頼にそむく権利はない。（略）」（伯爵 397・8）

のように、上司が部下に仕事のことと指示を与えるような場合（聞き手は、話し手の法律事務所に所属する弁護士で、無罪の判決の出た依頼人が実は罪を犯していると知り、そのことを告発すべく行動している）、

「あんたのやり方はまずいよ。一子さんは、銀弥さんを治そうとしてるんだろ。それを邪魔して、彼女を手に入れても、きつとどこかが綻びてくる。わかるだろ」

（略）

「じゃあ、どうしたらいいんだ。おれは」

「見てりゃいい。見張つていればいい。その人が、その人らしいやり方で、歩いたり、お茶を飲んだりしているのを。それで、もし、その人が、その人らしいやり方でいることを邪魔されているんなら、そのときがあんたの出番だ。堂々として助けてやりな」（ねむり

234・11）

のように、聞き手が現在の行為を反省して、話し手にどう振る舞いすべきか尋ねているのに答える場合など、「し」をすべきだという主張に相手を従わせられるような立場から言う場合は、「しばいい」で言い切ることも可能である。

以上、現代語では、「しばそれですむ」の意味の「しばいい」が「行為者に対する〈不満〉を表明する文になる」時、右に述べたような、相手を従わせられるような立場から言う場合を除けば、「しばいい」（「しばよかった」と言い切ることはできず）（「のだ」を下接させた「しばいいのだ」（「しばよかったのだ」は可能⁽¹⁶⁾）、逆接の接続助詞を下接させたり、確認要求の形をとつたりしなければならぬ⁽¹⁷⁾ということを見て

きた。相手を従わせられるような立場にない限り、「～」をすべきである。「～」をすべきであったという主張に反する姿勢を、聞き手、または、第三者が示していることに配慮して、一方的に「～ばいい」「～ばよかった」と言い切る形を避けて、逆接の接続助詞を付けたり、確認要求の形をとったりしなければならぬということかと思われる。(話し手の希望を表わす「～ばいい」に見られる制約と同様、ある種の「臆病さ」をここでも見ることが出来る。)

一方、江戸語においては、現代語にあるような制約はない。

聞き手、または、第三者の行為である「～」が実際には行なわれなかった状況をうけて、「～」をすべきであったと述べる場合

彦 へとなりうらでナ七八百もふけたからナ直に山谷の小張屋でナ

おごつてきたワイ 五 へそりやアおつたなしたがあそかあよせば能

はい 彦 へなぜ 五 へハテ酒がいけずかつぎがわるしかそうていあ

だらけねエハイ(穴知鳥 148下17)

モウちつと長く切ればいい。素人の切つたよふだ(富賀川拜見 356

下12)

江戸「(略)夫ほどの御深切でございますから、逆ものことに寄よせをたくやうになすつちやア下さいませんか。落話でも祭文でも、潮来新内、なんでもやらかします」金「ソレ其事しごとさ、最初しよつぽんから然さう出ればよ

かつた、(略)ハテ田舎でこそあれ、頼まれたことを否いやだと引く男

でねへさ、のう権十(狂言田舎操 卷之下 335・5)¹⁸⁾

はる(略)なんとおつせへすへぬしのやうな御如才のねへ客人はわつちらがよふなたらはぬ大み世のしんぞうを御買なんしちやアどぶ御氣にやアいらねへのサ(略)通 きたいたふうをい、なんなよ上

ゲ棲の下に名の書である仕着を着るうちやアどぶで座敷せへろくに遣はれると思ひなせへ鉄醬おたくろどぶの蛙雛おなまじやくし子を見るやうに手も足もねへところがおめへ方のあたりめへだ 是る さらほどにおもひなんすくらるならおかいなんせんければいい、ねへばからしい(青楼籬の花 344上15)

ヲやおいらんいつの間にマア来なすつたくるなら来ると前びろにちよつと人でもよこしなさればいい、出しぬけに起されちやア虫が動じるから(仮名文章娘節用 前編中 11ウ7)

そんなにびつくりせずと能じやアないか。私だどつて来られねへ宅じやアあるまいし但シ仇吉の外入いゝべからずと路次口へ札を出してお置きならよかつた(春色梅児誉美 三編卷の九 13ウ7)

由「仇さん、マア此やらうのごしゆでんのわけはへ 仇「エ、そのわけかへ。なアに何でもないが、肩はづして居るからサ(略)幸「手めへもうちつと、仇吉、だまつてゐてやればいい。余程三孝がいつもよりの、男のやうに見えたものを、大しくじりだ(春色辰巳

園 後編卷の六 326・14)

来がけに丹次郎が、此宅こへと誂へおきたりし、酒に着に蒲焼の岡持、裏口よりはこびいれる仇「ヲヤ、大そうにいろくと、およし

ならい、(春色辰巳園 四編卷之十二 429・2)

きよ「お元さんが参りましたがどうなさいますエ さま「ア、どふせうねへ トすこし考へて さま「どふぞ明日にしておくれといつておくれな(略)もと「ハイ左様なら トかへりゆく梅「わたくしには決しておかまひなさらずにお髪をなさればいい、ね。それぢやアお気の毒だ(春告鳥 三編卷之八 504・3)

次「(略) 母御さんはまだ、何様してお帰りがあるものか。たか
「なぜだエ。何様してお前知つて居るのだ、ト言ながら中の間の障
子を明る。次「ナニ、今其所で裏の東六さんに逢たらば、彼仁が
左様言たはナ。お前の内の母御さんの使に酒肴を誂に行といふから、
能聞て見たら、今夜は大壮に機嫌がよくつて、今少し酒で中入をし
て、夫から最些遊ぶといふ咄だ。左様して見れば、後に帰つてござ
つても御機嫌が能に違ひなひから安心だ、アハ、、、。たか
「左様かへ、それは嬉しいノウ。小「しかし次助どん、お前が今東
六さんに出合ては、又帰りが遅のなんのといふだらふ。知らなひ顔
をして呉ればよかつたノウ。(春色恋白波 初編卷之二 48・3)

聞き手、または、第三者の行為「」に關して、「」に代わる別な
行為がなされている状況、あるいは、別な行為がなされているわけ
はないが、なされていていいはずの「」がなされていない状況で、
「」をすべきであると述べる場合

お腹のたつ事が。おせんしても。しづかにおつせんすりやア。よふ
おせんす (甲駅新話 309 上 4・5)

女郎 (略) よくお出なんしたねサアおはいんなんしな 一座 そんな
ら一ツぶくのめの若草としやせうトすはる 女郎 たばこつけて出しこ、

へおあがなんんせばい、ね (傾城買四十八手 6ウ5)

里 コウちつと酒としやれやう くら 酒をばよしてちやつんなんせ
ばい、 (傾城買四十八手 14ウ4)

けち兵衛「けふもゑらい暑ぢやナばんとう「そんなに欲ばらずに昼寐で
もなさればい、 (浮世風呂 四編卷之中 7ウ1)

中六「(略) サア片端から出しやばれエ。闇穴めエ。(略) あば民「ド

レ、どいつだ中六。てめへ又。気が能過らア。片ぱしからしよび
き出して張くぢいてやりやアい、。(浮世風呂 四編卷之下 9ウ
7)

伊勢屋の隣の土蔵は万屋のかネ。まだ新しい蔵だが抹頭へ割が出た。
あれはやく左官に見せれば好い (四十八癖 三編 287・5)

真言を一針貫にして震へながらあるくが、ア行とはいひながらつら
い事たネ。(略) あれはよせば能い、はなはだ不量見だ。(四十八癖
三編 288・14)

松皮疱瘡、ア気の毒千万はやくお医者にかければ能い。今の内が療
治時だ、療治も時があるもんだテ。(四十八癖 三編 291・1)

あの位な男は、上総部屋の掃溜にやア踏付けるほどあるのに、女房
の欲目で色男に見えるさうで、嫉妬喧嘩が絶えねへのう。あんなに
大切ならば二重箱に納れて、封印をつけて、蔵の三階へしまつてお
けば能い。(四十八癖 三編 302・4)

何、ワン、べらぼうめ。古風な奴だ、ニヤンとでもなけばい、(一
盃綺言 269・12)

お三どのも同じく指た。ア馬爪は止ばい、。指ぬに劣りだのに不便
なことだ。(大千世界楽屋探 卷之下 435・5)

私斗り酒を呑で居て、お前お飯を給ればい、(春告鳥 四編卷之十
530・14)

くだらねへことばかり言て居ねへで。そのお茶をつんでくんな。そ
して衆人が菓子を食べればい、のふ (春告鳥 四編卷之十 532・12)

亀「それぢやア、姉さんを来て居て貰うぢやアねへか。★「それで
も姉はおざしきへ出ると申ますから。亀「ナンノ、もうよしにすれ

ばい、ナア。(春色袖の梅 二編中之巻 120・2)

小「姉上さん、振葉は最否かへ。糸「ナニ、否ではないがネ、最少し後刻に給様ヨ。小「何故だネへ。我慢してお上りならば能ネへ。

(春色恋白波 二編三之巻 123・10)

ヲヤ、お湯が熱浦のに、振葉をモウ一帖お上りなら能ネへ。否かへ、ト和合進めに於糸は完示(春色恋白波 二編三之巻 124・6・7)

なお、他に次のような例がある。

まき ちつとおつき合なんしな はや たつた今。ゑい山んさんの所で。きやまさんと。たべんした。ヲヤくきつい何もねへこつたの。

ゑい山んさんの所に。かくやのかうくがざんす。もらひにやんなんせば。い、ね(廓大帳 120上6)

この例は、聞き手の食事中に現れた話し手が、食べるものがあまりない状態で食事をしているのを見て、それを改善する方法として、「かくやのかうく」のことを教えるものである。この場合、「く」に代わる別な行為がなされているわけではなく、また、聞き手は、「かくやのかうく」のことは、今聞いて初めて知ったものであるから、「く」(「かくやのかうく」をもらいにやること)は、なされていいていいはずのことではない。しかし、「かくやのかうく」をもらいにやることに限らず、食べるものを豊かにする何らかの方策ということ言えば、それはなされていいていいはずのことであろう。なされていいていいはずの、食べるものを豊かにする方策がなされていない状況で、「く」という特定の方策(これ自体は、なされていいていいはずのものではない)をすべきであるとする場合ということになる。「行為者に対する〈不満〉を表明する文」とは言い難いかも知れないが、これに準ずるものと考えられる。

やはり、この場合、現代語では、「もらいにやればいい」と言い切ることはできず、「もらいにやればいいのに」などのように言うのではなからうか。

以上、「行為者に対する〈不満〉を表明する文になる」場合の「くばいい」の形式について、現代語で見られる制約が、江戸語には見られないことを述べてきたわけだが、「くばいい」と類似の他の表現についても、同様なことが見られる。

「く」ということでも問題ない」といった意味を表わす「く(も)いい」「て」の部分が、「たつて」や「ないで」であるものも含む)が、その「く(も)いい」にもかかわらず「く(も)いい」の「く」は、聞き手、または、第三者の行為)、実際には、「く」でない余計なことが行なわれている(行なわれた)、あるいは、行なわれていてもいい「く」が行なわれていない(行なわれなかった)という状況で使われる時、やはり、現代語では、

一番奥は空き部屋——空いているところがあんなら使わせてくれ
たつていいのにな、そりやまあ、こつちはただの付き人だけだよ。

(星 147・11)

「それならそうと早く云ってくれば——人が悪いです」

まだ恥ずかしさが抜け切れず、和夫は照れ隠しに不満を云った。

「昨日のうちに云ってくれてもよかつたのに」(星 161・11)

「そんなことは言わないで。あなたは前世から、いつもそうなのね」

「そう? 僕は前世からこういう人間だったんだ」

「そうよ。いつも遠慮深くて、誰に対しても丁寧だった。あたしにまでそんなに気を使わなくていいのに」(修羅 409・18)

「——で、ここだけのぶっちゃけた話、どうなんです？ 法月セン

セイはこういう心霊現象とか、悪霊の存在とかは信じる方ですか」

東邦テレビ制作部の菱沼プロデューサーが、卑猥な冗談を言うのと変らない口調でたずねる。やれやれ、と綸太郎は思った。なるべくそういう議論に巻き込まれないように、口数を減らしているのに、少しは察してくれたっていいじゃないか。(法月 71上9)

「何なの、麻子さんの夢って」

「内緒です」

「ケチだなあ、教えてくれたっていいじゃないか」(星 479・11)

のように、「のに」を下接させたり、確認要求の形をとったりすることが多く、「て(も)いい」で言い切るのは、

警視庁に登庁して、藤倉を掴まえた。久我が呼び止めると、最初藤倉はいやな顔をしたが、すぐに例の人なつこい笑みを浮かべて近寄ってくる。(略)

「どうした。もう少し休んでいてもよかったんだぞ」(修羅 750・18)

のような、「のだ」を下接した場合に限られる。

ただし、次の例のように、聞き手の不安や恐れといったものに対して、その場で、必要であるから安心しろと言うような場合には、「のだ」なしに、言い切ってもよいようである。

「まあそんなに不安そうな顔をしなくてもいい、時期が来たらまた制作の方へ戻ってもらうから」(星 21・15)

「金は使った？」と僕は聞いてみた。

「いや」と彼は言った。「一度飯を食わせて、銀座のクラブにでも

連れて行って、車代渡すくらいでいいだろう。そういうのは気にし

ないでいいよ。どうせ全部経費で落ちるんだ。(略)」(ダンス 上

123・9)

「車を動かすなよ。キーを抜いてこちらに渡さない限り、私は何も喋らない」

声を震わせながらも、持田は保身を忘れなかった。

「わかったよ。そんなに怯えなくてもいいぜ」(修羅 535・14)

江戸語においては、今述べた、安心しろと言うような場合以外にも、「て(も)いい」で言い切った例がある(後者は、「て」の部分が「ずと」であるものだが、同類のものと考えられよう)。現代語であれば、「そんなに顔色を変えないでもいいじゃないか」などと言うところであろう。

美の「そりやアい、が、かう寐て見ては死にたくねへのふ」千代「エ、そりやマア実さんすかへ。今いひなんした口もかはかねへに、もふいやにおなりなんしたかへ」美の「マアそんなものでもあらふ」千代「そんならいよくどふあつても」ト 見相かへて美の介をうらめしげに見て目

に泪 美の「そんなに顔色を変ねへでもい、。(略)」(今様操文庫

前編卷之三 133・5)

風齋「略」それにひきかへおめへさんは、よつほど虫がい、じやアねへか。口うつしに薬をのませるなどは、まことに不とゞき千万だ」美の「ハ、、、、そふ執念深いはずとい、。(略)」(今様操

文庫 前編卷之一 110・7)

なお、現代語にはない用法だが、江戸語の「ていい」には、「ていい」と同様に、「てばそれですむ」といった意味を表わしていると見

られる例がある。

「此ちくせうめ買ったてのせつたを代なしに仕ヤアがった(略) 最些と
はやく気がつくと能ったものヲ エ、残念な事をした(恐可志 前
編上巻 78・213)

丹「そうさちつとこまつて居るけれど何どうかなるだらうヨ 長
「イ、エそれでもむづかしいといふ事だから私は覚語をして居ます
ヨそして今マアいくらあるとい、のだネへ(春色梅児誉美 後編卷
の五 10才4)

この用法の「～といい」が、「行為者に対する〈不満〉を表明する文」
として用いられる場合、次のような、「～とよかった」で言い切った例
が見える。現代語であれば、「泊まってくればよかったのに」などと
言うところであろう。

モシ米さん、先刻の酒屋へ止宿てお呉だとよかつたねへ。モウく
足がいたくつて歩行れなひヨ。(春色袖の梅 二編卷之下 136・7)

四

以上、江戸語の「～ばいい」について、「～ばいい」と言い切る形の
使用が、話し手の希望を述べる場合、「行為者に対する〈不満〉を表明
する」場合において、現代語では限定的であるのに対して、江戸語では
より自由であったことを中心に述べてきた¹⁹⁾。

〔注〕

- 1 現代語の用例は、次のようなものによっている。書名の内、傍線の
部分が、引用に際して用いた略称である。引用に当たって、ふりがな
を省くなど、適宜表記を改めたところがある。「岩」は岩波新書、「角」
は角川文庫、「角ホ」は角川ホラー文庫、「河」は河出文庫、「講ノ」
は講談社ノベルス、「講文」は講談社文庫、「光」は光文社文庫、「新」
は新潮文庫、「集」は集英社文庫、「創」は創元推理文庫、「中」は中
公文庫、「文新」は文春新書、「文文」は文春文庫を、それぞれ表わす。
岡嶋二人「開けっぱなしの密室」(講文)・加納朋子「いちばん初
めにあつた海」(角)・阿部和重「インディヴィジュアル・プロジェ
クション」(新潮社)・山本博文「江戸のお白州」(文新)・若竹七海
「火天風神」(新)・宮部みゆき「蒲生邸事件」(文文)・高橋敏「国
定忠治」(岩)・田中雅美「クラスメイトに手を出すな!」(新)・三
浦俊彦「この部屋に友だちはいますか?」(河)・都筑道夫「最長不
倒距離」(光)・北川歩実「猿の証言」(新)・貫井徳郎「修羅の終わ
り」(講文)・折原一「遭難者」(角)・山口雅也「續・日本殺人事件」
(角)・和田はつ子「多重人格殺人」(角ホ)・村上春樹「ダンス・ダ
ンス・ダンス」(講文)・加納朋子「掌の中の小鳥」(創)・折原一
「倒錯の帰結」(講談社)・京極夏彦「どすこい(仮)」(集英社)・
乙一「夏と花火と私の死体」(集)・近藤史恵「ねむりねずみ」(創)・
法月綸太郎「法月綸太郎の新冒険」(講ノ)・ヘンリー・スレッサー
(宮脇孝雄他訳)「伯爵夫人の宝石」(光)・殊能将之「ハサミ男」(講
ノ)・高見広春「バトル・ロワイヤル」(太田出版)・服部まゆみ
「ハムレット狂詩曲」(光)・阿刀田高「不安な録音機」(中)・向田

邦子『冬の運動会』(新)・宮部みゆき『平成お徒歩日記』(新)・倉知淳『星降り山荘の殺人』(講文)・川添裕『江戸の見世物』(岩)・島田莊司『御手洗パロディ・サイト事件』(南雲堂)・笠井潔『道一ジェルソミーナ』(集)・東野圭吾『名探偵の呪縛』(講文)・麻耶雄嵩『木製の王子』(講ノ)・一橋文哉『闇に消えた怪人』(新)・泡坂妻夫『ゆきなだれ』(文文)・ベルンハルト・シュリンク(松永美穂訳)『朗読者』(新潮社)・恩田陸『六番目の小夜子』(新)

2 「うばいい」には、「いい」の部分が「よい」であるもの、「ば」の部分「なら」であるものを含めて考える。ただし、「ば」の部分が「たら」であるものは、尾方(一九九八a)で指摘されているように、「うばいい」とは、使われ方が異なるところがあり、別なものとして考えておきたい。例えば、次の「うたらいい」は「うばいい」には変えにくい。

祐子は続けた。「先に七原くんにごはん持つてあげたらいいんじゃない?」(バトル 528上9)

右の例は、「先に七原君にごはん持つてあげ」ることがいいことではないかという提案をしているものである。尾方(一九九八a)で「単純な勧め」と言われているようなもので、後に述べるような、「うばいい」の用法の中には納まらないものである。

3 ただし、国立国語研究所(一九六四)では「うとよい」と「うばよい」とを比較して、「うとよい」がやや積極的に聞き手にある行動をすすめており、「う方がよい」「うなさい」に近づくのに対して、「うばよい」は時に「うばそれですむ」という、消極的なニュアンスをとともなう」とした上で、「このようなニュアンスが、すべての「う

ばよい」「うとよい」に一樣につきまといっているわけではない」として、そのようなニュアンスが伴わない場合として、「特に、つぎに『よいが』がきて、話し手の希望をあらわすばあいには、『うば』でも『うと』でもちがいは見られない」としている。この二つに限ると主張されているわけではない。なお、「話し手の希望をあらわすばあい」は「が」を伴うことが多いのは確かだが、後に挙げる例のように、それに限るわけではない。

4 高梨(一九九五a)・高梨(一九九五b)では、「うばいい」を、「特定のよい結果を得るための手立てとして、当該事態が必要十分であることを述べる」ものと「〈願望〉を表す」ものの二つに分けており、本稿の分け方は、これに近いものである。ただし、「〈願望〉を表す」ものの一方を、「特定のよい結果を得るための手立てとして、当該事態が必要十分であることを述べる」もののみでなく、広く「うばそれですむ」ととらえる点など、若干の違いがある。

5 ただし、高梨(一九九五a)・高梨(一九九五b)では、「給料なんか安くてもいい。好きな仕事ができればいい」のような、「〈必要十分の願望〉」(高梨(一九九五a))・「最小限の願望」(高梨(一九九五b))には、「うとよい」は使えないことを述べている。本稿の分類では、「うばそれですむ」の意味を表わす用法のうち、「うと」という事態が得られる(得られている)ことで問題・不足がないということを述べるものである。

6 江戸語については、次の資料を調査した。引用に当たっては、濁点を付したり、ふりがなを適宜省くなど、表記を改めたところがある。「大成」、「洒落本集」としたのは、それぞれ、『洒落本大成』(中央公

論社) (数字は、巻数)、大東急記念文庫善本叢刊『洒落本集』(汲古書院)、のことである。

郭中奇譚(大成4)・辰巳之園(大成4)・遊子方言(勉誠社文庫)
 ・南江賦話(洒落本集)・俠者方言(大成5)・南閨雜話(大成6)・
 婦美車紫駟(大成6)・甲賦新話(大成6)・青楼楽美種(大成6)・
 寸南破良意(大成6)・穴知鳥(大成7)・大劇場世界の幕なし(大成11)・登美賀遠佳(大成11)・根津見子楼茂(大成11)・山下珍作(大成11)・富賀川拝見(大成11)・卯地臭意(洒落本集)・廓大帳(大成15)・傾城買四十八手(復刻日本古典文学館)・錦之裏(大成16)・取組手鑑(大成16)・傾城買二筋道(大成17)・五大力(大成21)・酩酊氣質(日本古典文学全集)・戯場粹言幕の外(新日本古典文学大系)・浮世風呂(前編―新典社複製本、二―四編―東京大学総合図書館蔵板本)・七癖上戸(叢書江戸文庫『式亭三馬集』)・国書刊行会)・早替胸のからくり(叢書江戸文庫『式亭三馬集』)・狂言田舎操(叢書江戸文庫『滑稽本集』)・一盃綺言(叢書江戸文庫『式亭三馬集』)・四十八癖(新潮日本古典集成)・浮世床(日本古典文学全集)・人間万事虚誕計(叢書江戸文庫『滑稽本集』)・古今百馬鹿(叢書江戸文庫『式亭三馬集』)・人心覗からくり(叢書江戸文庫『式亭三馬集』)・大千世界楽屋探(新日本古典文学大系)・青楼籬の花(大成25)・清談峯初花(叢書江戸文庫『人情本集』)・今様操文庫(叢書江戸文庫『人情本集』)・恐可志(人情本選集(大平書屋))・仮名文章娘節用(鶴見人情本読書会編「翻刻『仮名文章娘節用』」へ『鶴見日本文学』第2、4号)・春色梅児誉美(復刻日本古典文学館)・春色辰巳園(日本古典文学大系)・風

俗吾妻男(叢書江戸文庫『人情本集』)・春雨日記(古典文庫)・春告鳥(日本古典文学全集)・花名所懐中曆(人情本選集)・春色袖の梅(古典文庫)・春色恋白波(古典文庫)

7 この例は、形容詞の連用形、次の例は、打消の助動詞「ず」の連用形に、それぞれ、「は」(または、「ば」)が下接して、条件句を構成するものに「いい」が下接したものである。このようなものも、「いばいい」の一つの形として考えておく。形容詞、及び「ず」には、仮定形に「ば」のついた形を用いた、「いければいい」・「いねばいい」の例もある。二つの形の間には、使い分けがあるようで、調査範囲の中では、連用形+「は(ば)」+「いい」は、このbの用法に限って用いられ(連用形+「は(ば)」+「いい」が七例あるが、すべてこの用法)、他の場合には、仮定形+「ば」+「いい」が使われている(全八例中、「いばそれですむ」のcが三例、「話し手の希望」が五例)。

心が細くツても膽が太けりやアい、(春雨日記 三編巻の八 278)
 11) 「いばそれですむ」のcの例

われしらず大きな声をした。だれそきかねばい、が、壁に耳あり
 徳利に口あり、(四十八癖 初編 217・6) 「話し手の希望」の例

8 「早く死体が見つかってくれればいいと思います」

そう言うわたしに、辰巳部長は神妙な顔をして、うなずきます。

(遭難 1 28・14)

堀之内が携帯の電源を切っていてくれればいいと願った。(ハサミ 203上13)

のように、引用句の中に現れる文においては、今述べた二つの場合以

外にも、「うばいい」で言い切る文が現れることがある。引用句の中の文においては、必ずしも、実際に思った（言った）形がそのまま再現される必要はない。「うばいい」という趣旨のことを思った（言った）という意味で、実際の発話においては必要な要素だが、趣旨に直接関わらない「が」とか「な」とかいった部分が落とされた形で引用されることもありうるということであろう。例えば、実際には「見つかってくればいいが」と思ったり、言ったりしたとしても、引用としては、「見つかってくればいいと思った（言った）」と言ってよいわけである。

9 こうした、「な」を下接させた「独り言」の性格に関しては、森山（二九九七）で、「独り言」に使われる「なあ」は、「話し手が認識上の焦点を、その認識内容に一定の時間をかけて当てる、といった意味」を持つ、といった形で述べられている。

10 終助詞が下接した二例は、ともに「ね」の下接例であるが、聞き手に、自分の願いを叶えてくれるよう頼んでいるものであり、聞き手と希望が共有されているものではない。次のような、共有されていない内容を、控えめに述べる場合に「ね」が下接することがあるが、この「ね」もこの類であろう。

デートに居酒屋を使うのは避けた方がいいですね。女性はもつとロマンティックなお店にエスコートしてあげなくてはいいけません。
（星 34・1）

「今、お茶をいれますわ。甘いものとおせんべいとどちらがいいかしら」

「どうぞおかまいなく。でも、どっちかっていうと、おせんべい

がいいですね」（クラス 65・5）

婆文字さん。私らにもお詞がありさうなもんだネ。（浮世風呂

三編卷之上 7才3）

モシくお詞の中だが。赤子子は冬向あるめへね（浮世床 二編

卷之下 348・12）

11 集めた江戸語の用例の中には、「な」を下接させた例はなかった。ただし、同じナ行音の終助詞である「の」の下接例は見出すことができた。

はやく。夜が明ケりやアい、のヲ（南閨雑話 61上2）

現代語の「な」と同じく、「の」が下接した「独り言」も、その文の内容について思いを巡らせるような文になるようである。

竹本祖太夫。霧沢蟻鳳。ハテおつな事があるの。漢には賈太夫な

ど、いふも有たれど。日本には奇しい。（浮世床 初編卷之上

268・10）

つるぞさらはなひ浄るりをさらふのふ。あれはたしか六玉川の内
の千鳥の玉川といふのだが、何所でも稽古にするのを聞なひのに、
どふして語るのかしらん（春告鳥 初編卷之三 417・2）

12 終助詞としては、「ね」が下接しているが、これも、聞き手に、自分の希望を叶えてくれるよう頼んでいるものであり、聞き手と希望が共有されているわけではない。やはり、共有されていない内容を、控えめに語る場合の「ね」と考えてよいと思われる。

13 例えば、次のような例である。

「わかりました。じゃあこれから言うことを調書に書き取ってく

ださい」

「そんなことは、あなたに指示されることじゃないよ。こちらが必要だと思つたら書くから、あなたは訊かれたことに答えりゃいいんだ」(修羅 28・4)

14 反事実的な「～ばいい」に、形式上の制約があることについては、益岡(一九九九)でも触れられている。すなわち、「後悔・残念さの意味を表す反事実的表現は『のに』を持たない場合は主体が1人称であり、『のに』を持つ場合は主体が2人称である、ということが基本的に成り立つ」として、「～ばよかった」でも、「主体が2人称」の時は、「のに」が必須であるとされている。また、3人称の場合については、「残念さの意味を表す表現の主体には3人称が現れにくい」もの、やはり「のに」が必要であるとされているようである。

なお、「3人称を主体とすることが許される」のは、「～と思った」という表現に埋め込まれる「形のみである」として、「～と思った」に埋め込まれない形、例えば、「あの人も一緒に来ればよかったのに」のような形は、「対話文」としても、「独話文」としても成り立たないと述べられている。しかし、「3人称を主体とすること」は、

編集長が最初から倉田につけてくれればよかったのに。そっちのほうで教えるにしても教わるにしても上手く回転していただろう。

ついそんな愚痴が出る。(木製 87下18)

のように、「『～』と思った」という表現を伴わない「独話文」でも、また、「あの人も一緒に来ればよかったのに」の形では使えないにしても、例えば、「ね」を下接させた「あの人も一緒に来ればよかったのにね」のような形であれば、「対話文」でも、使うことは可能であ

ろう。

15 「～」がなされていない状況であっても、「～」がなされているはずのものでなければ、ここには含まれない。例えば、次の例では、「～」は実現していないが、「～」は将来「捜査一課の刑事が事情聴取に来たとき」に実現すればよいことであり、なされていていいはずのことではない。こうした例は、「行為者に対する〈不満〉を表明する」ものには含まれない。

捜査一課の刑事が事情聴取に来たときは、さつきはよくが話した線で証言しておけばいいだろう。(ハサミ 361上14)

あるいは、次の例も同様である。「ロシア人たち」に追われている状況で、それから逃れるための方策を教えるものである。この発話の時には、「～」が実現していないが、その板の正体を知らない聞き手にとって、その方策はわからなくて当然であると考えられる。なされていいはずのものとは言えないものである。

あの黒いギザギザの板は一体なんだったんだ? どうして君は、このロシア人たちにあの板を投げればいいと言ったんだ?(御手洗 下 105下8)

16 「～ばいい」、「～ばよかった」では言い切れないのに、なぜ、「のだ」が下接した場合には、「～ばいいのだ」、「～ばよかったのだ」と言えるのかは、よく分からないが、「のだ」にその文で述べていることを、他者には了解してもらえないものとして位置づけるといった働きがある(田野村(一九九〇)で「披瀝性」という形でとらえられている事と関連するかと思う)ためではないかといったことを考える。しかし、これについては、稿を改めて論じたい。

17 話し手の希望を述べる「うばいい」の時と同様、引用句に含まれる文においては、この制約はない。

重要参考人で引っぱって、落としの名人の手で自供させればいい、と思うかもしれない。そんなこととして、もし俺たちの推理が大はずれだったら、マル……いや、犯罪心理分析官の面目丸潰れだ（ハサミ 218下1）

翌日忠治を徳の家に移すにあたって、安五郎たちは徳が平生より町を妬んでいるのを知っていたので、ここにくる途中で急に発病したと、嘘も方便と偽った。すでに、町と同衾中に発作が起こったことを知っていた徳は大いに怒り、町のところで倒れたのであるから、町が面倒をみればよいと一行を押し返した。（国定 148・11）

また、書き言葉においても、この制約を超えて「うばいい」が使われることがある。話し言葉と違って、書き言葉においては、こうした配慮は必要とされないということであろう。

福次郎、丑之助、伊之助の三人は、唐船に乗り移った。（略）
福次郎らは、船の上に積んであった棕櫚綱一捆と焼物類と思しき三籠を盗み取って、船へ取り下ろした。

これでそのまま逃げればよかった。しかし、三人はもう一度唐船に乗り移り、同様の品を一籠盗み取り、丑之助に背負わせて下ろそうとしていたところ、一人の唐人が起き出して来て、追いかけてきた。（お白州 205・11）

18 この例は、江戸者の発言ではない。ある村で、操り芝居の興行が行なわれる、その村の人物の発話である。

19 注6に挙げた調査対象外だが、次のような例もある。

くめ（「略」）夫よりか私きやア先刻のはなしだと、急度峯次郎さんが婦多川の唄女か、唄ひ者の家へばかり行ってお在ののだと思ふは。
京「ア、急度然だヨ、（略）私きやアまだお知己にならなひけれども、お前さんのお妹御のお房さんとかお呼のが、和哥町とかにお在じゃアありませんか。其お房さんにお前さんが能頼んでお遣りなら宜らふ子へ。（春色梅美婦祿 四編卷之十 岩波文庫 365・2）

婦多川に入りびたっている峯次郎が家に帰るようになる手立てとして、「聞き手がその妹に頼むこと」を提案しているものである。「うばいい」という手立てによって、あるいは、「う」という事態が成立することによって、可能である、ということを表わすものであるが、そのような「うばいい」が、この例のように、話し手にとって望ましいこと（この場合は、聞き手にとっても望ましいことであるが）が得られるよう、聞き手に労をとってもらうことを求めるのに用いられる場合、現代語では、右のような言い方はしないのではないだろうか。「あなたが妹に頼んでくれればいいだろう（いいんじゃないか）と思うんだけど」のように、持って回った言い方をする必要があるのではないかと思われる。ここでも、現代語で必要とされるような配慮が、江戸語では必要とされていない。「いい」と言い切らずに、「宜らふ」と推量の助動詞「う」が付されているところに、それなりの配慮を見ることはできるが。）

〔参考文献〕

- 尾方理恵（一九九八a） 「ト・バ・タラ・テハについてー非事態性後件 of the 用法ー」 『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究叢集』 汲古書院
- 尾方理恵（一九九八b） 「『PバQ』と『Pすればいい』の意味の広がりー（付） 突き放し用法『すれバ？』についてー」 『千葉大学留学生センター紀要』 4
- 国立国語研究所（一九六四） 『現代雑誌九十種の用語用字 第三分冊』 国立国語研究所
- 高梨信乃（一九九五a） 「条件接続形式による評価的複合表現ー スルトイイ、スレバイイ、シタライイー」 『阪大日本語研究』 7
- 高梨信乃（一九九五b） 「スルトイイとスレバイイとシタライイー条件接続形式による評価的複合表現①ー」 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法』（上）くろしお出版
- 田野村忠温（一九九〇） 『現代日本語の文法Iー「のだ」の意味と用法ー』 和泉書院
- 益岡隆志（一九九九） 「反事実性と人称」 『神戸外大論叢』 50・4
- 森田良行・松木正恵（一九八九） 『日本語表現文型』 アルク
- 森山卓郎・安達太郎（一九九六） 『文の述べ方』 くろしお出版
- 森山卓郎（一九九七） 「『独り言』をめぐってー思考の言語と伝達の言語ー」 川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』 ひつじ書房